

No.2920

現代イランにおける宗教性に関する人類学的研究

一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

谷憲一

本研究の目的は、イラン・イスラーム共和国でシーア派の儀礼として行われる、イマーム・ホセインの追悼儀礼の様相を他の社会領域に鱗ける変化と関連付けて分析することで、今日のイラン社会における宗教性を、近代性と結びつけながら考察することである。

本年度は主に、①これまでの研究成果の発表と課題の抽出②ホセイン追悼儀礼の多様性に関する調査、③世俗的な志向を持つムスリムにとっての宗教儀礼に関する調査、④宗教儀礼における音楽的・舞踏的实践と法学的・社会的位置づけに関する調査、という4つの計画を進めた。

まず、2018年6月2日および3日に弘前大学で行われた日本文化人類学会では、「ホセイン追悼儀礼における情動と身体性をめぐるポリティクス」という題目で発表を行った。

の発表は本研究助成以前に行ってきた研究に基づいており、一ここで得たコメントに本助成金による調査の課題を明確にした。

今年度、シーア派の儀礼が行われるイスラーム暦のモハッラム月は9月10日から9月20日までであった。フィールドワークは8月27日からイランのテヘラン市内に滞在し、11月15日まで約2か月半滞在し、儀礼の参与観察および上記の調査に関する資料の収集に努めた。

フィールドワークによって得たデータにより、ホセインの追悼儀礼において、ポピュラー音楽の流用の事例が見られるなど、儀礼はイラン社会における音楽やダンスをめぐり規制との緊張関係のもとで捉えなおせることが明らかになった。

また来年度の課題として、秘密裏にとりおこなわれる自傷儀礼に対する社会の反応や国家による規制が、痛みをめぐり感性の変化として記述できることや、カルバラー巡礼に関する調査を行うことで、「世俗化」に関する再検討を行うことを試みている。